

「中級日本語に関する問題点の提起と解決策」

The Challenges of Teaching Intermediate Japanese and possible Solutions

ヘンストック・麻里子 (ボストン大学) Mariko Itoh Henstock (Boston University)

1. はじめに

中級レベルの日本語、こと大学三年生の指導法に関しては、初級段階に比べると、学習者のスキルの伸び悩みなど、問題も多く、各大学でも思考錯誤をくり返しているようである。ここでは、大学三年生の指導を長年にわたって行っている筆者が、大学三年生の学習者と教師がともに抱える問題の提起をし、中級段階の学習者の壁をどうやって越え、次の段階へとステップアップできるかを模索した。また、「げんき」から「中級の日本語」(The Japan Times)への移行期の問題点に注目し、その原因を追究すべく行った現三年生 26 人へのアンケート調査結果も報告する。

2. 「中級」段階の問題点

久野 (1995) によると「中級」段階の学習者が陥りやすいのは 1. 伸び悩み、2. 学習に負担を感じ、3. 受動的で、4. 興味を失う、といった状態である。これは久野も言っているように、学習した知識が膨大になり、消化しきれず、コミュニケーション能力や四技能を均等に伸ばすことに直結しがたいと解釈してよいだろう。

ただ、中級段階と一口にまとめて言えば、上記のようになるが、少なくともボストン大学のようなクラス 20 人を抱える大規模校での問題点はこれだけにとどまらない。上記の問題点に加え、幅広い学習者の多様性に対処しなければならなくなるのが三年生を教える悩みとなる。大学三年生のクラスには、大学一年生から上がってきた日本語学習が三年目の学生に加え、高校で数年日本語を学習してきた大学一年生、他大学からの編入者、ヘリテッジ・ラーナー、日本に在住歴、あるいは留学経験のある者、自学自習者、中国、韓国系の学生などがプレースメントテストを経てクラスの中に入ってくる。漢字の到達レベルの違いはもとより、彼らの要求度、動機、伸び悩みや学習に対する負担のレベル、すべてが異なってくることは言うまでもない。

3. 学生による評価

では、現学生は三年生のクラスで何を感じているのだろうか。現三年生 26 人を対象にアンケート調査をした。ここにその結果得られた学生の読解に対するコメントのいくつかを中心に挙げてみることにする。

A. 否定的なもの

- The chapter readings were kind of boring, but expectedly so, given that they're from a textbook
- The textbook readings were really dull & not that helpful. More on having us practice speaking.

B. 肯定的なもの

- The readings we did together in class were the best
- Very useful
- The readings were appropriate
- Valuable & long-lasting learning

C. その他

- Not enough focus on writing
- Wanted more in-class kanji practice

-(Other says more vocabs. & grammar practice)

D. 会話練習への要求と満足度

-More oral practice on grammar

-A weekly half hour speaking session such as that introduce 3rd-year class would benefit students greatly

(ここではBUのESLプログラムの日本人学生との協同学習の成果を会話練習の満足度として挙げる学生が多かった。)

読解、またその他のスキルに関しても、学生によって矛盾しているかのようなコメントが目立つ。これは学習者の背景の違いによる要求度の多様性を示していると結論づけていいだろう。ヘリテッジ・ラーナーのための専門クラスなど、背景の違いに応じたクラスができれば理想的だが、財政上、そういったクラスの実現には程遠い。

4. 解決への模索

さて、以上のような学習者集団に対してどのような問題点の解決策があるだろうか。ボストン大学では多くの学生が二年間で「げんき」を終えてすぐ、日本語三年生に上がり、「中級の日本語」(The Japan Times)を使用している。クラス内での学習(ビデオの視聴、読解、ペア・ワーク、コンテキストで学ぶ文法学習など)では上記久野(1995)が指摘しているような問題点への解決策にはなり切れない。しかし、以下の試み、特に(3)は成果をあげている。

- (1) スキット・パフォーマンス
- (2) 口頭試験
- (3) 学内ESLプログラム日本人留学生との協働学習授業及び昼食会

藤(2009)によれば、先行研究によると協働学習には「対等」「対話」「創造」が重要だという。

(1) スキット・パフォーマンスは日本語学習者同士(2)の口頭試験は教師)とで行われるとはいえ、既習文法を取り入れた上に「創造」性をもたせたことが学生の満足度や達成感につながった。また、(3)学内ESLプログラム日本人留学生との協働学習では、共同プロジェクトを課し、クラス内外での「対等」「対話」「創造」協働作業を可能にした。また、新たに四つ目の要素、コミュニティーへの「貢献度」を加え、ボストン大学や、日本人コミュニティーに貢献できる共同プロジェクトを行っているという自負も学生に動機を持たせる上で役立った。また、(3)では、特に友達作りにも重点を置いたので、学生同士の自主的な学習外の活動がかなり盛んだったことも付記しておきたい。

受動的になりがちな学習にこれらの試みを組合わせたことにより、上記久野(1995)が挙げている1、3、4の問題点に関してはある程度までの解決策を提供できたように思う。

5. 問題点の提起

とはいうものの、2で、久野(1995)が二つ目に挙げた、多くの中級学習者が負担に感じている学習または学習量に対する解決策は見出せていない。殊に4年前に一、二年生の教科書を「なかま」から「げんき」に換えて以来、読解により重きをおいた「中級の日本語」の学習量に適応しきれない学習者が目立つ。彼らは読解に負担を感じ、3-Aに挙げたように、中級になっても話し言葉中心の授業を好む傾向にある。初級段階から三年生への移行期がより一層困難に感じられる所以である。今回の発表後、ボストン大学以外の大学でも似たような傾向があることを大会参加者から聞いた。

「なかま」と「げんき」の話し言葉、文法説明、漢字、読解練習の比重の違いは明らかにある。しかし「げんき」に読解練習がないかといえばそうではない。関(1995)は「書き言葉の文章読解については中級段階に入ってから扱えばよいといった『暗黙の了解』があったような気がする」と指摘している。教科書の違いだけではなく、私たち日本語教師側が、いまだその殻を破れていないことも中級への移行期を難しくしている原因なのかもしれない。こういった原因を探るべくアンケート調査を行った。

6. アンケート調査

アンケート調査では、本年度春学期の日本語三年生 26 人に質問形式で何が三年生のカリキュラムにおいて大変または困難であるかを各項目ごとに、1 から 5 の段階（1. 「そう思わない」から 5. 「強く思う」）で評価してもらうことにした。14 項目の質問のうち、5 項目を特に「げんき」から「中級の日本語」への移行期の難しさに充てた。また、できるだけ各自のコメントも書いてくれるよう頼んだ。ちなみに、ボストン大学では日本語の授業が、一、二年生は週 4 回 4 時間、三年生では週三回、三時間である。

7. 調査結果

7-1. 三年生のカリキュラムにおいて困難であるかの質問に対して

項目によってはばらつきがあり、語彙や文法の量に負担を感じている学生も何人かみられたが、読解に関しても多くの学習者がともに感じているような問題点は発見できなかった。文法や語彙の暗記、頻繁に行われるクイズにはさして重く負担を感じていない学生も多く見られた。

これはボストン大学における学習者の多様性を反映した結果だと言えるだろう。宿題の量に関してもしさして強い不満はみられなかったが、春学期になって宿題の量に慣れたのかもしれないし、秋学期に時間の余裕がなく、春学期に日本語を続けることをあきらめた学生が含まれていないからかもしれない。ただ、春学期になっても、いまだ漢字の書きを負担に感じている者が少し目立った。

7-2. なぜ「げんき」から「中級の日本語」への移行が困難かという質問に対して

かなり多くの学生がもっと読解に慣れていれば今の読解が楽だっただろうと答えた。またその理由を三年生以前の段階における読解練習の欠如に起因すると感じている学生が多く、関（1995）の指摘を裏付けるような結果が出た。漢字に関して、一、二年生でもっと学習すべきだったと多くが感じていることもわかった。ただ、それと同時に、三年生なのだから、漢字や読解が多くて当然だと納得している学生も少なからずいたことも付け加えたい。

7-3. 学生の移行期の困難さに対するコメント

三年生ともなると日本語プログラムをよくしていくことに協力的である。なかにはなるほどと感心させられるコメント、矛盾を呈しているコメントもあるのでここにいくつか紹介したい。

-The books are not too difficult. It is the large upgrade in skill level that is difficult.

-Much higher degree of difficulty in 3rd year.

-readings in new textbooks are much more difficult than those in *Genki* I and II.

-*Intermediate Japanese* book was a huge improvement from *Genki* II. The integrated approach helped me keep track of my kanji.

-Transition to 300-level classes is supposed to be difficult. I would recommend doing more kanji in LJ111-212.

-Risky to stress too much kanji in LJ111-212, because this might interfere with the acquisition of grammar and vocabulary.

-Way we learned kanji in LJ111-212 was radically different from LJ303, making the transition harder.

LJ111-212 とは一、二年生のコース名で、LJ303 は三年生の一学期目のコース名である。

8. おわりに

本文には書かなかったが、日本語学習者の裾野が広がった分、会話を最重要視する学生が増え、それに迎合せざるを得ない先生側の事情なども原因として考えられるかもしれない。ところで、アンケート調

査をするきっかけになったのは同様のことを感じている同僚とのちょっとした会話からである。これではいけないと調査の数字をもとに一、二年生担当の何人かの同僚と話をしたが、ボストン大学でも、この実情に手をこまぬいているわけではない。「げんき」の教材に合わせた読みものを追加したり、一、二年生で学習する漢字の数を少しずつ増やしたり、といった努力はしているのだが、まだ現実に追いつかないのが現状である。

参考文献

- 久野 由宇子 (1995) 「日本語中級とは何か『文化中級日本語 I』の作成を通して」<シンポジウム「日本語中級教材をめぐって」> 平成7年度 日本語教育学会秋季大会予稿集, 日本語教育学会 118
- 藤 美帆 (2009) 「母語話者と非母語話者の会話参加の様相—6人グループの協働学習の事例から—」第1回日本語教育学会研究集会 口頭発表要旨 日本語教育 143号, 日本語教育学会 118
- 関 正昭 (1995) 「橋渡し教材(初級から中級へ)の必要性」<シンポジウム「日本語中級教材をめぐって」> 平成7年度 日本語教育学会秋季大会予稿集, 日本語教育学会 29